

月刊絵本「こどものせかい」の研究 その 3

—岩崎ちひろ「あめのひのおるすばん」を中心に—

柴村 紀代

藤女子大学 人間生活学部 保育学科

1. 絵雑誌の流れと「こどものせかい」

至光社の月刊絵本「こどものせかい」の成り立ちについては、すでに 2001 年度藤女子大学紀要 40 号で述べた。しかし、今回とりあげる岩崎ちひろが、至光社の「こどものせかい」においてどのような役割を果たしたかを考えるために、この時代の絵雑誌の流れについて、ふれておきたい。

絵雑誌の歴史はまず、1922 年 1 月に創刊された「コドモノクニ」(東京社)から始まった。大正時代に入って児童向け月刊誌「子供之友」(婦人之友社 1914 年 4 月創刊)や、「赤い鳥」(赤い鳥社 1918 年 7 月創刊)等が相ついで出されたが、これら児童雑誌に対して、本格的な絵雑誌として「コドモノクニ」が誕生した。出版元の東京社は現在の婦人画報社の前身である。編集主任に和田古江を迎え、岡本帰一、武井武雄、清水良雄、初山滋など当時の童画家たちの活躍の場となった。彼らは大正時代のモダニズムの影響を受け、ユニークで斬新な童画はその後の絵本画家たちに多大な影響を与えることとなった。

1926 (昭和 2) 年幼稚園令が公布され、保育項目に「観察」が加えられたことがきっかけで、フレール館から観察絵本「キンダーブック」が創刊された。編集顧問に幼児教育の研究者として著名な倉橋惣三を依頼する等、その後の科学絵本の基礎を作った絵雑誌である。戦時中、雑誌統合令によって「日本ノコドモ」に吸収されたが、1946 年 8 月に復刊され、現在も刊行されている。

至光社の「こどものせかい」の前身は 1948 年 5 月に創刊された児童雑誌「BABY DIGEST」である。これは小学生向けの総合文芸誌だったが、その後、3号(1948 年 8 月 25 日発行)から「ベビーダイジェスト」とカタカナ表記になり、5 巻 8 号(1953 年 1 月号)から「こどもの世界」、ついで 7 巻 9 号(1955 年 2 月号)から現在の「こどものせかい」に改題され、カトリック系幼稚園向けの月刊絵雑誌へと移行した。この「こどものせかい」の改題時期を 1993 年発行の「日本児童文学大事典」¹⁾が 1953 年 6 月と間違えて表記したために、2002 年発行の『は

じめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ』²⁾の年表でも同じ間違いがくり返されている。53 年 6 月号はここから判型が従来の A 6 版から A 5 変形版に代わり、誌面も一新した時期ではあるが、誌名自体はすでに 1 月号から使用されていた。改めて訂正しておきたい。

「こどものせかい」が 1 冊 1 話の月刊絵本になったのは、福音館書店の月刊絵本「こどものとも」の創刊された 1956 年 4 月から遅れること 7 年目の 1963 年 4 月、第 15 巻 11 号の「ほえるらいおん」(佐久間彪・文、柿本幸造・絵)からである。

福音館書店の「こどものとも」が創刊された 1956 年は、文部省が「幼稚園教育要領」を出した年で、保育内容を 6 領域に区分した中の「言語」の領域で、「絵本を楽しむ」などと、絵本についての記述が明文化された時期でもある。

「こどものとも」は、当初子供を持つ母親のための月刊雑誌「母の友」の付録として「子供に聞かせる一日一話」が原型だった。しかし、創刊から 3 年後、類似誌が出るのをきっかけに、一冊一話の物語絵本を月刊で出す月刊絵本「こどものとも」が誕生した。当初は販売も伸び悩んだが、安価な月刊誌でありながら、一冊の絵本形態が人気を呼び、又、従来の童画家だけではなく新人の画家を大胆に起用するなどの努力が実って、やがて絵本の福音館書店時代を迎えることとなった。

福音館書店の「こどものとも」の編集者は松居直で、1926 年京都市生まれ。武市八十雄は 1927 年パリで生まれている。二人は共に日本における戦後絵本の興隆期を築いた人達で、それぞれの絵本観に基づき、多くの絵本作家を育ててきた。二人は、絵本特集の座談会³⁾などで共に語り、互いに相手の世界を尊重してきた。特に武市八十雄の絵本観には、絵本を幼児の発達段階に応じて与えるグレード別の思考はなく、至光社のキャッチフレーズ「0 才から 100 才までの感じる子どもたちへおくる絵本」の言葉通り、「感性の絵本」という独特な世界を目指してきた。

紀要 40 号・41 号において、杉田豊・三好碩也の「こどものせかい」における「感性の絵本」とは何

かを見てきたが、今号では岩崎ちひろによって独特な発展をとげる「感性の絵本」について考察してみたい。

2. 岩崎ちひろの絵本

岩崎ちひろは本名知弘。1918年、福井県武生市にて出生、翌年東京に移る。父は陸軍建築技師、母は女学校教師の長女に生まれる。洋画を岡田三郎助、中谷泰、赤松俊子（丸木俊）に学び、藤原行成流の書も学ぶ。1945年、空襲で長野県に疎開、両親が長野県北安曇郡松川村で開拓を始める。この地が後に安曇野ちひろ美術館⁴⁾となる。1946年日本共産党に入党、上京し「人民新聞」の美術記者となり、新聞や雑誌のカット、さし絵を描く。1950年、弁護士松本善明と結婚。仕事面では、1949年、アンデルセンの原話を紙芝居「おかあさんのはなし」として教育紙芝居研究会から出版、文部大臣賞を受賞した。1951年、長男猛誕生、翌年、東京都練馬区下石神井に家を建て、亡くなるまでこの地で制作した。その後、この地に岩崎ちひろ美術館⁵⁾がオープンした。

上京して以後、新聞のカット、さし絵・絵雑誌・単行本・教科書の仕事を数多く手掛け始めていた。1956年、絵本の仕事としてははじめての福音館書店の「こどものとも」の仕事を引き受け、「ひとりのできるよ」（1957年6月号「こどものとも」12号 小林純一作・岩崎ちひろ画）と16号の「みんなでしようよ」（同）を制作した。

その頃のちひろについて、松居直は、「はじめての絵本のことなど一絵本編集者の目から」と題して次のように書いている。⁶⁾

「この二冊は初期の「こどものとも」——それも創刊一年目の後期と二年目の初期の作品で、私が絵本の編集を手がけはじめた頃の、私にとってもごく初期の仕事である。生き生きとした幼児の生活体験を詩のような言葉と楽しいリズムのある絵で構成した絵本を作りたいと考えて、小林純一さんに物語詩を創作していただいたのが、“ひとりのできるよ”であった。この原稿を見て、さし絵画家に岩崎ちひろさんの起用を考えた。」

当時、岩崎ちひろは、「キンダーブック」や「こどものせかい」などにさし絵を描いており、福音館書店の「母の友」の童話のさし絵も描いていた。しかし、「こどものとも」での仕事は前記の二冊だけで、松居直は岩崎ちひろを「絵本画家になれる

人だ」と評価しつつも、「岩崎ちひろさんの画風を生かす絵本の企画がどうしても出来なかった。」と述べている。「写実的で生真面目な岩崎さんの絵は、物語絵本を何でも器用にこなすというような質のものではない。いわば守備範囲の狭い画風である。それに岩崎さんの絵のモチーフは人物が主である。あの抒情性と清潔なロマンチズムを生かすことが私にはできなかつた。」と続く。ここに「こどものとも」が目指そうとしたものが、はっきりとしたストーリー性のある物語絵本であり、岩崎ちひろの本領は、物語に合わせた絵を描くより、自分の感性を伸びやかに表現できる世界を模索していたことが感じられる。その感性の世界を模索する岩崎ちひろの才能を十二分にひき出したのが至光社の武市八十雄であった。

「やがて1968年から岩崎さんは武市八十雄という優れた編集者を得られ、見違えるように自分のイメージを自由に繰りひろげられた。武市さんとの6冊の絵本は、なんとしても岩崎さんの仕事の一頂点を示すものだろう」と松居直も認める名コンビが誕生する。しかしちひろが1974年に亡くなることで、二人のコンビはわずか6年で終わりをつげた。「最初のお仕事を私が担当し、最後のお仕事を尊敬する編集者であり友人である武市さんが担当されたことも不思議なご縁であった。岩崎ちひろさんの死は、ほぼ同時代の人の私にとっては、ある意味で絵本の戦後が終わったような感慨がある。あのようなすがすがしいひたむきな絵は、もう日本の絵本にはみられないかもしれない。」と松居直をして深く哀悼のことばを書かせた岩崎ちひろの死であった。

3. 「あめのひのおるすばん」の制作過程

至光社の「こどものせかい」に岩崎ちひろのさし絵が毎号登場してくるのは、1958年4月（10巻12号）からである。1959年4月に創刊された「季刊ひろば」⁷⁾の表紙も創刊号から4号までの初年度は岩崎ちひろであった。

そのちひろと武市八十雄が本格的にバッテリーを組むのが1968年6月号の「こどものせかい」（21巻1号）に登場した「あめのひのおるすばん」である。これに取り組むまでに、さまざまな形で機が熟し始めていた。まず、先にも触れたように「こどものせかい」が、一冊一話の物語形式を取り入れたの

が1963年5月号『ほえるらいおん』（佐久間彪・文楯本幸造・絵）からであり、1967年から国際版絵本シリーズが開始され、その出版のために武市は戦後初めての海外に出かけて行った。そこで一流の海外の絵本に出会う中で、「絵本でなければできないものを模索し始める。」

特に2度目に海外に行ったとき、アメリカのハーパー・アンド・ロウ社のゾルトー女史から話を聞いたことがひとつのきっかけとなった。⁸⁾ アメリカやヨーロッパの絵本作りが、すでにテレビの影響や映像メディアを視野に入れ、絵本でなければならぬものを模索しているとき、「日本はまだ絵と文があれば絵本だと気楽に考えている。まことに極楽トンボだ」と言われたという。海外に日本の絵本を売り込む以上、英米の整然の美に対して、日本の持っている雑然の美でいくしかないと思いをくくって、帰ってきた武市八十雄は、その話を、岩崎ちひろに熱く語ったのである。⁹⁾

それを聞いたちひろも又、何か新しい絵本の時代を予兆して、二人で勉強会をしようと提案する。二人は武市の運転する車に乗り、熱海ホテルで5日間、勉強会を開くことにした。ホテルに着いた日、武市が雨にけぶる海を見ているうちに「雨の日」というイメージがうかび、その言葉をちひろに伝えると、「おるすばんっていうの、どうかしら？」とちひろがつけ足した。ちひろは「あめのひのおるすばん」というタイトルに感情移入してすぐに描きはじめたが、最初はうまく行かない。二人はそれぞれ部屋に戻って寝ようとしたが眠れず、テレビをつけるとちょうどフランス映画の「しのび泣き」をやっていたという。二人とも偶然、このテレビを見て「これで行こう」と意気投合する。「全体が詩情の中にうんでいて、そこに無駄な説明がなく、真の意味で深いものの暗示が香りとして、画面とセリフによってかもしだされているのである。」後に武市八十雄はその映画の雰囲気をご紹介しているが、それはそのまま『あめのひのおるすばん』に流れる詩情と重なってくるものであった。

こうして、通常、遅筆のちひろが3か月かかる絵本作りが、わずか5日間で書きあがった。二人は、合宿の成果を喜びながら帰宅の途中、今後の制作について、いくつかの確認をとりかわす。それは要約すると次のようなものであったという。

- ①感じ感じさせることに集中しよう。
- ②ひき算でいこう。絵本のテーマをたし算にすると説明的になる。ひき算のつもりが一番大事なものだ

けにする。

- ③勢いを大事にしよう。
- ④絵と文の底にかくし味をこめよう。
- ⑤不完全だが十分なものに。完全を目指すとは説明的になる
- ⑥絵本全体を一枚の絵とする見方で判断しよう。

これらは、以後、至光社におけるちひろと武市とのコンビの絵本『あかちゃんのくるひ』『となりにきたこ』『こたりのくるひ』『ゆきのひのたんじょうび』『ぼちのきたうみ』や、『ひさの星』『戦火のなかの子どもたち』（2冊とも岩崎書店）など、ちひろ晩期の作品を生み出す土台となっていた。

岩崎ちひろ自身がこの晩期に絵本への境地を語った言葉がある。

「やっとな絵本がわかりはじめた。いや絵本の世界が独自の世界であるということが……。そしてそれは不思議なことに、すっかり失ってしまっていたが、子どもの時に絵を描くことが楽しくて楽しくてしやうがなかったのと同じ気持ちを今、とりもどすことができた。絵本はやっぱり素朴で、そういう意味で子どもに根ざすものである」

4. 『あめのひのおるすばん』における文と絵の関係

『あめのひのおるすばん』を作るとき、岩崎ちひろと武市八十雄は、まずタイトルを決め、そこから広がるイメージを追って、たらしこみの手法を使い、非常にラフな絵を描いていった。出来上がった絵の順番を前後に動かしながら、自づとつながってくる言葉を書きとめていった。従来の絵本なら、まずストーリーがあって、それを文が説明し、文にそって絵が展開していくが、「感じる絵本」をめざした武市八十雄は、言葉よりもまず絵から広がるイメージを大切にたした。

そこで読者である私たちも、武市とちひろがたどった過程を同じようにたどることで、武市のいう「感じる絵本」の意味が少しは理解できるのではないかと考えた。

実験の方法は、絵本の言葉の部分を隠し、絵本の流れの中から、各ページにどんな言葉がつけられているか、言葉あてゲームのように、あらかじめ用意した言葉あてシートに各ページの言葉を記入するやり方を取った。

協力してくれた方は、2003年度北海道文学館で開

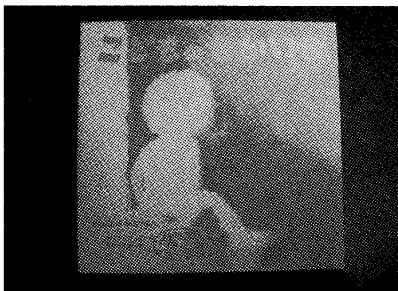
講しているウィークエンド・カレッジ「絵本論の世界」の受講生9名、夜間の保育専門学校生7名、北海道子どもの本連絡会冬の合宿研参加者13名である。何人かは『あめのひのおるすばん』を見たことがあると答えたが、言葉までは記憶に残っていないか

ったようだ。

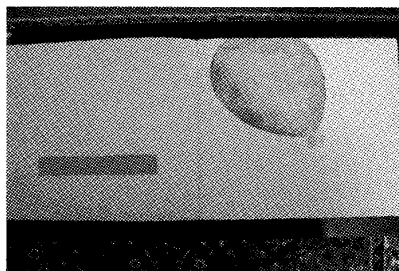
以下は、後日、整理したものを表にしたものである。シート数29だから29通りの答があるわけだが、似たようなものをまとめて整理した。

『あめのひのおるすばん』テキスト・文	読者が想像した文
見開き1 おかあさん どこまで いったか みてきて	<ul style="list-style-type: none"> ・ふうせんもひとりぼっち ・今日は雨の日、おるすばん ・おかあさんはおでかけ ・アッ、とんだ ・ふうせん、どこへいくの
見開き2 だれも いない おへやなの	<ul style="list-style-type: none"> ・今日はおるすばん ・外で遊べない ・私ひとりでおるすばん ・雨はまだやまない ・雨、やまないかしら
見開き3 すぐって、いったのに まだかしら	<ul style="list-style-type: none"> ・チロとふたりきり ・ねこちゃん おいで ・子ねこと遊んでる ・ミーコはおるすばんできるかな ・あそぼうね
見開き4 ど・れ・み・ふあ・そ・ら・し・ど ど・し・ら・そ・ふあ・み・れ・ど	<ul style="list-style-type: none"> ・雨の音はピアノの音 ・ピアノひいても ・ポロロン ポロロン ピアノもひとり ・ピアノはもうあきた ・ピアノのれんしゅうしたくない
見開き5 あまだれも うたってる そうだ ゆび なめちゃ いけないって	<ul style="list-style-type: none"> ・雨はまだふっている ・つまんない ・おかあさん まだかなあ ・あやとりしようか ・だれもいないおうち
見開き6 おはなが ぬれて なんだか ふしぎ な ン だ か	<ul style="list-style-type: none"> ・お庭の花もさみしそう ・あっ、きれい ・あやめがぬれてる ・お庭の菖蒲がぬれてます ・お花は雨を楽しんでるみたい ・お母さんが 大切に育ててる花
見開き7 びりりん びりりん かくれても だめ きこえちゃう	<ul style="list-style-type: none"> ・あっ、電話が鳴った。だれだろう ・リリーン だれかしら ・電話が鳴ってる どうしよう ・リ・リーン 出るのがこわい ・ひとりぼっちでさびしいな
見開き8 こどもの おさかな おかあさんの おさかな いまの でんわ おかあさんかしら	<ul style="list-style-type: none"> ・金魚、いつもぬれてるね ・池の魚もつまんない ・外に出たらおこられるかな ・雨の中で何をしているの？ ・水たまりの中には 魚が 1匹、2匹

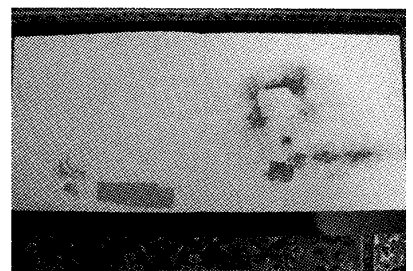
<p>見開き 9 だんだん くらく なってきた おかあさん は・や・く</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・おかあさん、まだかなあ ・雨やんだかなあ ・おうちもぬれてる ・だんだん暗くなってきた ・玄関で お出むかえしてあげよう
<p>見開き 10 わたしの おねがい おまどに かいた</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・早く帰って来てって、おまどにかいた ・へのへのもへじ まーだかなー ・あれ、あそこにみえているのは？ ・窓にかいた絵も 泣いてるみたい ・おかあさん まだかなあ
<p>見開き 11 あっ おかあさん あのね あのね</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・あっ、おかあさんだ ・おかあさん、おかえりなさい ・ねむくなった ・お母さんが帰ってきて よかった ・ひまわり畑にいるみたい あったかいな〜
<p>見開き 12 でんわ なってよ もう いちど おるすばんだって できたんですもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ねこちゃん、だっこしてあげる ・おかえりなさい ・ちゃんとおるすばんできたよ ・ただいま、雨もうやんだかな？ ・早く外で遊びたいな



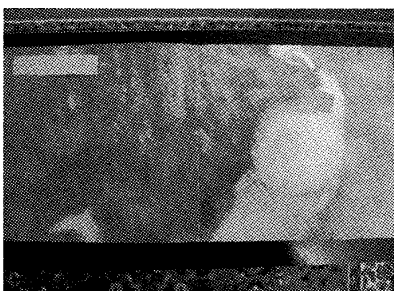
表紙「あめのひのおるすばん」



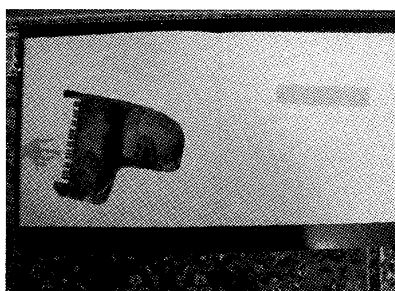
見開き 1



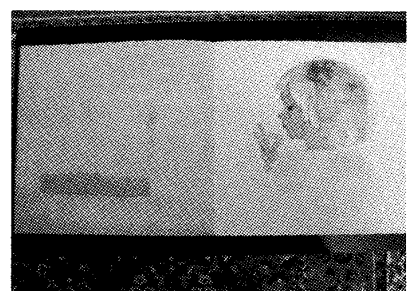
見開き 2



見開き 3



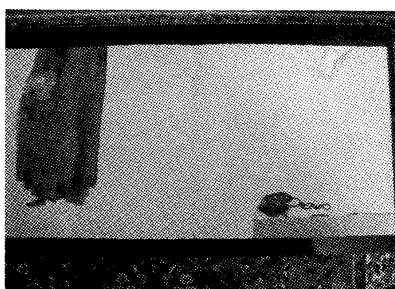
見開き 4



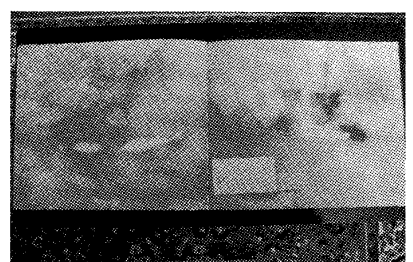
見開き 5



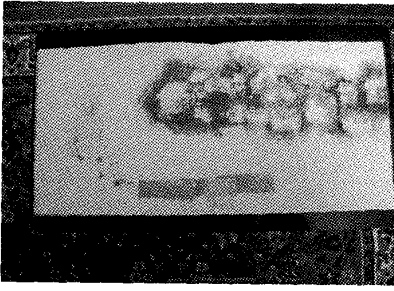
見開き 6



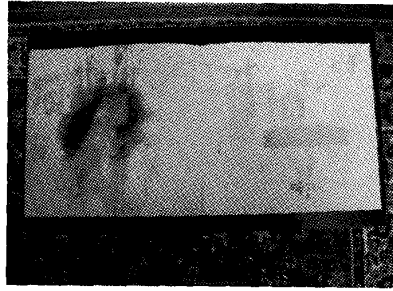
見開き 7



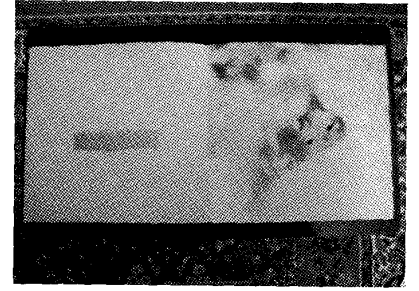
見開き 8



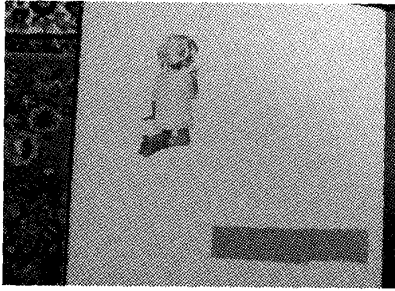
見開き 9



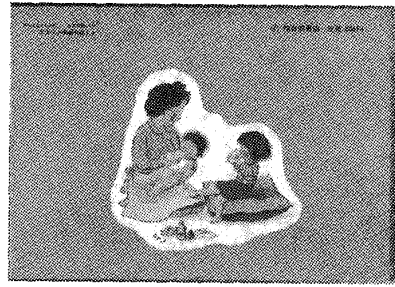
見開き 10



見開き 11



見開き 12



「はじめてのおつかい」裏表紙

5. 読者の想像した文との比較から見えてきたもの

〈見開き 1〉

まず意表をつく風船ひとつにみんなとまどった。タイトルからの連想で、「ふうせんもひとりぼっち」や「ふうせん、どこへいくの」の呼びかけが文になる。しかし、絵本の原文では、「どこまでいったかみてきて」という、かなり飛躍した言葉になっている。

〈見開き 2〉

絵は窓から見える雨ににじむ外の風景で、少女は、ビーズでも通しているような絵である。余白の大きさが少女の手持ち無沙汰を表しているかのようだ。ここでは少女の心情を代弁する言葉「今日はおるすばん」「外で遊べない」などがシートに書かれている。原文の「だれもないおへやなの」は、なかなか出てこない言葉だ。

〈見開き 3〉

一転して全体が茶色にぬられた画面に白いぼかしで少女が子ネコとたわむれている動きが見てとれる。読者の文は、ネコの名前やネコと遊んでいることをつい言いたくなる。しかし、原文は只、少女がネコに語りかける「すぐっていったのにまだかしら」のみ。「チロとふたりきり」も「子ねこと遊んでる」も絵の説明にすぎない。

〈見開き 4〉

おもちゃのピアノを片手の指一本で弾いている様子は、いかにも処在なげな様子が画面から伝わってくる。これにつける文は、いろいろ考えられるが、原文の「ど・れ・み・ふあ…」がいちばんすっきりする。

〈見開き 5〉

少女は何か言いたそうだが、何を言わせていいかわからない場面。

〈見開き 6〉

「お庭の花もさみしそう」「あやめがぬれてる」など、思わず見たままをそのまま言ってしまうが、原文は同じ見たままでも、「お花がぬれて なんだか不思議」と少女の視点が貫かれている。

〈場面 7〉

読者の文はやはり説明が多い。

〈場面 8〉

この場面はわかりづらい。ちょうど絵本の半分を過ぎたあたりで、前ページのとつぜんネコと二人だけの世界が電話の音で破られた後を受けてのページである。少女の不安感やさびしさが一気にふき出てきた、その強い感情が、この絵全体のみどり色に出ている気がする。その中に二ひきの親子の魚、右の赤や青はおかあさんと一緒に行った縁日の金魚か何か、楽しい思い出の残像のように見える。

〈場面9〉

日暮れて行く夕景色。雨はあがったように見える。待ちきれずに長ぐつをはいて玄関で待っている少女の絵。原文は「おかあさん は・や・く」と少女の願いがことばになっている。

〈場面10〉

この場面は〈場面9〉と逆のように見える。〈場面8〉の窓から雨がにじむ外の池を見た後、〈場面10〉になって、その水滴のついた窓に思わずらく書きを書いて、それから〈場面9〉の待ちきれず、玄関に出て待つという方が自然の流れのようだが、かえって、そのような理詰めの流れをきらって、〈9〉と〈10〉を入れ変えたのかもしれない。

〈場面11〉

母親は描かれていないが、この暖かい色彩が何よりも強く、母親の胸にとびこんだ少女の幸福感を表している。ここの文は「おかあさん！」で十分のようだが「あのね あのね」と続くことで少女のあふれるような思いが伝わってくる。

〈場面12〉

このラストの少女の手の動きをどう読み、一体、どんな言葉でしめくくるべきか、誰もが悩むところである。前のページの、母親が帰って来て、少女が母親の胸にとびこむところで物語は終わるのだが、言わば最後の一枚は、物語の後日談に近い終わり方である。例えば、林明子の代表作『はじめてのおつかい』（「こどものとも」1976年3月）では、裏表紙に、ほっとした少女が牛乳を飲みながら、母親に手当てしてもらった足をそっと母親のひざに乗せているポーズが描かれている。又、はじめておつかいに行けた少女が、もう一度、元の甘えっ子の少女に戻ったかのようなほほえましい絵だ。それに対して、「あめのひのおるすばん」のラストの場面は、文も「電話なってよ もう一度 おるすばんだって できたんですもの」という、あきらかに少女の成長を暗示したものになっている。この場面での読者の文はどれもほっとした少女の心の再確認にとどまってい、少女の成長までは思いがいたらなかった。

6. 『あめのひのおるすばん』から見た「感じる絵本」とは何か

改めて絵本全体をながめたとき、その余白の多さ

に驚かされる。余白は文を入れるための余白ではなく、文も絵も最低限の情報しか伝えていない。それがかえって読者に無限の想像力をひき出し、るすばんをする少女の不安やさびしさへの共感を誘う。

特に「こどものせかい」の表紙に見られる青に白抜きの少女の輪郭は、少女がどんな少女かを読者の完全な想像に委ねていることを象徴しているようだ。

「感じる絵本」とは、まず何よりも絵本画家と読者のイメージの共有があげられる。「あめのひのおるすばん」というひとつの言葉から、岩崎ちひろは心の中に浮かびあがってくるさまざまな心象のイメージを絵に描いていった。そのイメージの断片をつなぎあわせ、配列し、ひとつの絵本としての流れと、物語空間を作りあげたのは、自らを「絵本制作者」と位置づけた武市八十雄の仕事だった。

二人がどのような過程で、この一冊の本を仕上げで行ったかを完全に辿ることは不可能だが、今回、文を隠すことで、ある意味で絵本が解体され、読者は否応なく制作過程の初期の絵そのものと直接向きあうことになった。それによって、絵本の配列の妙や、余白の持つ意味、文の役割の大きさを改めて強く感じることはできたのではないかと思う。

武市八十雄、岩崎ちひろが共に愛読した世阿弥の『花伝書』の一節「秘すれば花なり 秘せずば花なるべからず」の言葉に自づとつながって行くような「あめのひのおるすばん」の空白のとり方や、絵本の流れのゆるやかな結びつきや思いきった飛躍など、押さえてこそ伝わってくる情感が、すなわち「感じる絵本」の真骨頂ではなかったか。

「あめのひのおるすばん」には「感じる絵本」の最も大事な要素である、「理解」ではなく「情解」の世界、心で感じる世界が豊かに広がっていることを今回改めて感じさせられた。

注

- 1) 『日本児童文学大事典』日本児童文学学会編
大日本図書 1993年
- 2) 『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ』鳥越信編
ミネルヴァ書房 2002年
- 3) 「日本児童文学 臨時増刊 絵本」(1971年12月
すばる書房盛光社)所収の座談会「戦後絵本の
発展」のこと。司会は古田足日(児童文学者)、
パネラーは太田大八(画家)、佐藤英和(こぐま
社)、武市八十雄(至光社)、松居直(福音館書店)
という豪華な顔ぶれであった。この臨時増刊号は
すぐ売り切れとなり、1974年「日本児童文学別
冊 絵本」として再刊された。
- 4) 安曇野ちひろ美術館 1997年4月長野県北安
曇郡松川村に開館。館長は息子の松本猛。
- 5) 1977年、世界最初の絵本専門美術館となる岩崎
ちひろ絵本美術館がちひろの生前住んでいた下
石神井で開館。2002年9月全館新築し、ちひろ
美術館・東京と名を変え現在に至る。
- 6) 『岩崎ちひろ作品集』第4巻月報 1977年3月
岩崎書店
- 7) 「季刊 ひろば」大人の読者のために、幅広い
執筆者に依頼し、エッセイや対談を載せた。
- 8) 「戦後絵本の歩み展」図録 岩崎ちひろ絵本美
術館 1986年 INTERVIEW 聞き手松本猛
「私の絵本づくり」 武市八十雄より
- 9) 「岩崎ちひろ作品集6」月報『絵本の世界』を
ささえたもの」 武市八十雄
7. 松本猛・松本由理子『ちひろの世界』
講談社カルチャーブックス 1991年
8. 松本由理子編『いわさきちひろ若き日の日記「草
穂」』 講談社 2002年
9. 松本猛・広松由希子編『いわさきちひろ展』
カタログ ちひろ美術館 1997年
10. ちひろ美術館・編『ちひろと世界の絵本画家た
ち』 講談社 2000年
11. 松本猛『僕が安曇野ちひろ美術館をつくったわ
け』 講談社 2002年

参考文献

1. 中西敏夫編『児童文学者人名事典』
出版文化研究会 1999年
2. 黒柳徹子 飯沢匡『いわさきちひろ』
講談社α文庫 1999年
3. 松本猛 『母ちひろのぬくもり』
講談社α文庫 1999年
4. 松本善明 『妻ちひろの素顔』
講談社α文庫 2000年
5. いわさきちひろ絵本美術館編
『ちひろのアンデルセン』 講談社文庫 1994
年
6. いわさきちひろ『ちひろのことば』
講談社文庫 1978年